

本案内

くらしと協同の研究所

2022 年総会記念シンポジウムのご案内

◆日 程 7月2日(土) 13:00~17:10 シンポジウム 終了後 第30回総会
7月3日(日) 9:30~12:30 分科会

◆会 場 京都テルサ (リモート参加と会場参加との同時開催)

※コロナ感染状況によっては全面リモートに切り替えます。

「協同のネットワークを地域でどう創るか」

(開催趣旨)

今回のテーマ設定には、二つの背景があります。一つは、昨年の総会記念シンポジウム「東日本大震災と協同組合」での議論です。現地とかかわりの深い研究者と東北各地の協同組合関係者から、被災地域の現状や今後の展望について報告をいただきましたが、そこから明らかになったのは、安心して暮らすことができる社会をつくるうえで生協をはじめとする協同組合が役割を果たすためには、日頃からの組織の枠組みを超えた連携が大切であり、地域の仲間との関係性をつくる方法の必要性でした。まさに、協同組合原則の一つである「コミュニティへの関与」(第7原則)を具体的にどう実践するかが問われています。

二つは、一昨年12月に労働者協同組合法が成立し、本年10月に施行されることです。森林組合法以来42年ぶりの協同組合に関する法律ということで注目されていますが、この法律は協同のネットワークづくりを進めていくうえで重要な内容を謳っています。それは、協同労働(組合員が出資し、意見を反映しながら、自らが事業に従事する)の考え方を通して地域のさまざまな課題を解決し、「持続可能で活力ある地域社会の実現」(第1条)をはかろうとしている点です。

シンポジウムでは、まず、協同労働の今日的意義をどう理解し、地域のつながりづくりに結びつけていくのかについて、研究者から基調講演をいただきます。次に、兵庫県但馬地域と京都府京丹後地域における実践について報告していただき、ディスカッションを行います。事例は特定の地域を取り上げますが、参加者の皆さんが自身の地域を改めて見つめ直し、協同のネットワークづくりに向けて多様な仲間と手をつなぎながら、ともに考え、ともにできることに気づく機会になればと期待しています。

研究所運営委員長 北川 太一 (摂南大学)

主催：くらしと協同の研究所

〒604-0857 京都市中京区烏丸通二条上ル蒔絵屋町258 コープ御所南ビル4F
TEL:075-256-3335 FAX:075-211-5037
E-mail: kki@ma1.seikyou.ne.jp (1は数字)

7月2日（土）13:00～17:10 シンポジウム：京都テルサ東館 3F 大会議室

○ 開会あいさつ 13:00～13:10

第1部 基調講演 13:10～14:20
 「協同労働の今日的意味と可能性—地域づくりの深化に向けて—」
 大高 研道 氏（明治大学）

第2部 実践報告 14:30～15:50
 報告1:「若者サポート、森づくりの取り組み—但馬地域における実践—」
 上村 俊雄 氏
 （企業組合労協センター事業団 但馬地域福祉事業所）
 報告2:「地域のネットワークづくりにどう取り組むか—京丹後地域の実践を中心に—」
 古村 伸宏 氏（日本労働者協同組合連合会 理事長）

第3部 ディスカッション 16:00～17:00
 コーディネーター 青木 美紗 氏（奈良女子大学）
 登壇者： 上記報告者
 コメンテーター
 細川 孝 氏（龍谷大学）
 東田 一馬 氏（京丹後市大宮地区 つねよし百貨店代表）
 コーディネーター まとめ 17:00～17:10

※総会 17:30～18:00

7月3日（日）9:30～12:30 分科会：京都テルサ**第1分科会 「若年層と創る未来の協同社会****—産直・倫理的商品・組合員参加を事例に組合員のニーズを探る—**

ポスト・グローバリゼーション／ポスト・コロナの未来は、協同社会・社会的連帯経済セクターの拡張なしに持続可能なものになり得ません。同セクターを構成する生協はそれゆえ、一般企業同様の経済性追求よりも連帯性・社会性の高い「生協ならではの」の取り組みを重視し、持続可能な未来を創出する主役となることで、若年組合員のニーズをとらえて、次世代生協への発展を果たすと考えます。

本分科会は、「産直」「倫理的商品」「組合員参加」の3つの連帯性・社会性の高い「生協ならではの」の取り組みを分析対象とし、若年層をはじめとする組合員のニーズを探ることで、未来の協同社会・次世代生協に発展する道筋を見出そうとするものです。

コーディネーター 辻村 英之 氏（京都大学） 山野 薫 氏（近畿大学）

報告Ⅰ：生協産直をめぐる組合員の意識とその世代間差異—米の産直事業を事例として—
 鬼頭 弥生 氏（京都大学）

コメント 松原 拓也 氏（三菱UFJリサーチ&コンサルティング）

報告Ⅱ：持続可能な倫理的消費に関する研究 玉置 了 氏（近畿大学）

コメント 岩橋 涼 氏（名古屋文理大学）

報告Ⅲ：利用と活動を通じた若年組合員の参加と関係性の実態について 加賀美 太記 氏（阪南大学）

コメント 浮網 佳苗 氏（日本学術振興会特別研究員）

第2分科会 「購買生協は高齢期の生活を支えられるか？」

－「生協10の基本ケア」を合言葉にして－

この分科会では、あえて「購買生協」を主語に「生協10の基本ケア」をクロスして考えます。「生協10の基本ケア」は、生協福祉事業部だけにかかわる言葉ではありません。そこには「尊厳を護る・自立を支援する・在宅を支援する」という、人として矜持すべき考え方がベースにあります。その上で、普段のくらしに生かすスキルが備わっています。決して福祉事業部だけのものではありません。生協が次世代にどのような価値観を残すのか、そうした本質に迫るものが潜んでいます。ともすると、「購買事業が本業だから」、「福祉事業は赤字」という縦割りの感覚に傾斜しがちですが、「生協10の基本ケア」を合言葉に双方の事業が互いにかかわりあい、くらしを支える生協のより確かな将来を展望できるのではないのでしょうか。「生協に入っていてよかった」。この言葉が次世代に受け継がれるよう、活発に交流したいと思います。

コーディネーター 川口 啓子 氏（大阪健康福祉短期大学）

解題：超高齢社会の再認識 － ピークはこれから

報告Ⅰ：組合員も職員も知っておきたい「生協10の基本ケア」－ くらしに活かして介護予防も

小田 史 氏（大阪健康福祉短期大学）

交流：「生協10の基本ケア」から発想を飛ばしつつ、生協の事業や活動を考えてみます

グループディスカッション

報告Ⅱ：なぜ、生協が福祉事業に取り組むのか － 原点に立ち返って

浜岡 政好 氏（佛教大学名誉教授）

第3分科会 「ロングセラーコープ商品から考える次のロングセラー」

生協は、組合員の声（生活）に寄り添うことを基本としながら、同時に時代や社会の変化を敏感に読み解くことを通じて、これまでに先駆的な商品をコープ商品として生み出してきました。さらにその中からは数十年にわたり組合員に利用され続けているロングセラーに育ったコープ商品も数多くあります。

現在では多くの企業がマーケティングの一環として、商品開発・改良に顧客の意見を取り入れることを当然のようにおこなっています。しかし、生協はそれらに先駆けて長年にわたり商品の使用者である組合員の声を聴き、その声に応えることを愚直に繰り返すことを通じて様々なロングセラーコープ商品を誕生させてきました。そしてその実現には、生協からの困難な要求や課題に対して真摯に向き合い、生協とともに一つ一つ問題解決を図ってくれるパートナーである取引先企業が存在が欠かせません。

第3分科会では、ロングセラーとなったコープ商品の開発・改善に関わる取引先企業からご報告をいただきます。その上で、組合員と生協の担当者、取引先企業がどのように関わるなかでロングセラーにまで成長したのかを解き明かし、皆様とこれからの時代において組合員や社会から求められるコープ商品とは何なのかを考えるきっかけとなる企画にしたいと思います。

コーディネーター 下門 直人 氏（京都橘大学）

報告Ⅰ：「ティーパックだしを家庭に普及させた『味パック』」

豊田 滋之 氏 株式会社カネソ 22

報告Ⅱ：「業界にイノベーションを引き起こした『にがり充てんとうふ』」

福永 寿章 氏 さとの雪食品株式会社 大阪営業部

報告Ⅲ：「家庭からゴミの減量を目指した『芯なしロール』」

寺岡 謙将 氏 丸富製紙株式会社 西日本事業本部